特集 三波分団

3 第1線の火点を倒し、第2線延長の合図を待つ指揮者と1番員、2番員
4 第6の選手である補助員。吸水管をしっかりと支える
5 応援団で埋め尽くされた観客席
6 操法終了後、会場の電光掲示板に三波分団のタイムと総合得点が表示された

1 漁師町らしく大漁旗を掲げ大きな声援を送った能登町応援団
2 第1線の延長。2番員が第1・第2ホースを延長し、3番員、4番員が協力して吸水管を後方の水利まで延ばす

最強の証 あかし

第19回大会準優勝、第20回大会優勝という記録を打ち立て、ポンプ車操法の技術向上を志す全国の消防団員から目標とされてきた能登町消防団三波分団。
10月12日、挑戦する立場から追われる立場となった三波分団が、再び全国の舞台に立った。
結果は惜しくも準優勝。大会2連覇は逃したが、前人未到の大記録が「最強の分団」を証明した。

取材協力：千葉県山武市　加瀬智代
岩手県一戸町　久保田太一

Document
12.OCT.2008　Tokyo BigSite
第21回
全国消防操法大会

「固いきずなで結ばれた仲間と共に、最高の舞台に挑むことをここに誓います」。

三波分団・天幸治嘉班長の選手宣誓で幕を開けた第21回全国消防操法大会。今年は自治体消防60周年記念大会として、東京ビックサイトで10月12日に開催された。

会場では家族、地域住民、分団員、町出身者、関係者などたくさんの人が応援席を埋め尽くした。

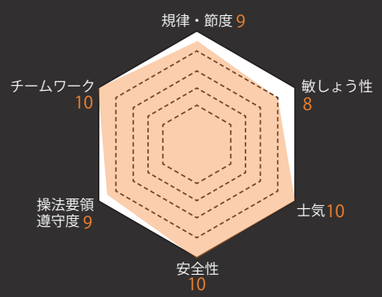
2年前、178・5点という得点で全国の頂点に立った三波分団は、今大会の優勝ラインを180点以上と想定し日夜厳しい訓練を積み重ねてきた。

しかし、競技が始まり第1番目に出場した岡山県和気町消防団がいきなり190点という高得点をたたき出す。その後も180点台が続出したが、18番目に登場した三波分団はプレッシャーに負けることなく周囲も納得させるだけの素晴らしい操法を披露した。

50分後、会場の電光掲示板に187点という得点が表示される。190点には及ばなかったものの目標を上回る高得点を獲得し、準優勝が決まった。

3大会連続で準優勝、優勝、準優勝という大記録を残した三波分団。その実力が紛れもなく全国トップであることを証明した。

◉審査される6項目から見る三波分団の操法（団員による自己分析）



7 入場行進は前回大会優勝県の代表が優勝旗を掲げ先頭を歩く
8 三波分団の入場行進。プラカードを掲げるのは、補助員の時長弘志団員
9 午前の部終了後披露されたアトラクション。東京消防庁の女性職員が華麗なパフォーマンスを魅せた

特集 三波分団

最高の絆（きずな）

5年間―。
ポンプ車操法で全国のトップレベルを維持してきた三波分団。お互いを信頼し、助け合い、共に汗と涙を流してきた5人は、誰よりも固いきずなで結ばれている。

1番員
田邊 直樹（30歳・波並）
Tanabe Naoki

大会では負けたけど、やれるだけのことはやったので悔いはありません。今回の操法は個人的にはミスもあって50点の出来でした。

4年間、同じメンバーで操法をやってきて本当に楽しかったです。4人には感謝しています。操法はここで一回やめて外から見たいと思っていますが、メンバーとはこれからも三波分団員として一緒に楽しくやっていきたいですね。

この4年間、家族に協力してもらって毎日遅くまで練習してきました。家族には本当に感謝しています。ありがとうございました。

平成15年に入団し16年から1番員を担当している。1番員は第1線で第3ホースの延長と放水を担う。1番員が最初に止まる場所が、続く2番員3番員の軸となる大切なポジション。前回の全国大会では最優秀選手にも選ばれた。

指揮者
天幸 治嘉（44歳・波並）
Tenkou Haruyoshi

操法はもちろん、操法以外でもチームワークという言葉がこれほど当てはまる5人はいません。前回の全国大会が年齢的にも最後と思って挑みましたが、4人のおかげでもう一度全国の舞台に立つことができました。しかも選手宣誓という大役まで果たすことができ、幸せだと思っています。本当に最高のメンバーです。選手宣誓は思ったよりも緊張もせず、最高の気分でした。

しかし操法では気負い過ぎて声が続きませんでした。これからは後継者がいればその指導がしたいと考えています。

平成4年入団。1番員、4番員、3番員を担当して15年から指揮者となる。操法歴は16年。指揮者は「集まれ」「乗車」「操作始め」など隊員に号令をかける。規律節度を重視する三波分団において重要な役割を担っている。

4番員
山田 久就（34歳・波並）
Yamada Hisanari

全国大会では、本番で100%の力を発揮できた分団が優勝します。今回は前回優勝ということもあり、勝つためには120%の操法が必要でしたが、何かが足りなかったのだと思います。

操法を始めて7年間、ほかのメンバーの負けん気が強いため自分も負けていられないという気持ちを保つことができました。勝つ喜びも、負ける悔しさも共に経験した「最高」の5人です。

今後は石川県の操法が全国でも注目されます。県全体のレベルアップに貢献できればと考えています。

平成11年に入団し、13年から1番員、15年から4番員を担当している。4番員はポンプ車を操作し、水を送る。冷静に周りを見渡しながら、一瞬の判断で水圧を細かく調整する。最も操法を熟知し、メンバーの精神的な支えでもある。

3番員
山谷 聡司（29歳・矢波）
Yamatani Satoshi

今までやってきた仲間と最後までやれて良かったです。個人的には流れが悪く思うようにはいきませんでしたが、操法は一発勝負の世界。だから楽しいのだと思います。

5人のメンバーは、自分が悪いときには助けてもらい、ほかのメンバーが悪いときには助け合ってきた本当にいい仲間です。5年間、自分を信じて、仲間を信じてやってきました。満足しているし本当に楽しかったです。

長い間、家族や地域の人などたくさんの人に支援してもらいました。本当にありがとうございました。

平成13年に入団し、15年から3番員を担当している。吸管投入作業と第2線の第1、第2ホースの延長を担う。3番員は減点される項目が多いため、より緻密（ちみつ）さが求められる。

2番員
竹下 浩市（29歳・矢波）
Takeshita Kouichi

これが最後と思って挑戦した1年でしたが、結果は見せ場もなく凡ミスも出ました。これが今の自分の実力だったということです。でもやるだけのことはやったという充実感はあります。

メンバーは、いろいろな面で尊敬でき、信頼もできる、兄弟のような最高の5人でした。そして三波分団全体が家族のような感じがします。

いろいろと迷惑をかけたけど我慢してくれた妻、子ども、親みんなにありがとうと言いたいです。応援してくれた皆さんにも本当に感謝しています。

平成13年に入団し15年から2番員を担当している。2番員は第1線で第1、第2ホースの延長、第2線では第3ホースの延長と放水を担う。操法は2番員で決まると言われるほどの要であり、スピードとスタミナが要求されるポジション。

最大の援（たすけ）

家族、地域住民、消防署、行政、職場、消防団仲間など、三波分団はたくさんの応援・支援を受けて全国の舞台に挑んだ。そして支えてくれたすべての人たちのために最高の操法を披露した。全国の注目を集めた最強の分団に送った最大のエール。

来年からは3番員 同級生には負けたくない

補助員
時長（ときなが） 弘志（ひろし）さん（波並）

最初は練習がきついというイメージがあった三波分団。田邊に誘われてから1年後に入団しました。今年7月の県大会から補助員を務め、操法では防火水槽に投入された吸管を押さえる役目をしています。

この半年間、ほとんど毎日2時間以上の練習をしてきました。そばで見ていても5人のチームワークや意思疎通はすごいと感じます。自分は来年から3番員といわれているので、山谷の動きを見ながら流れを覚えたり、ポイントを教えてもらっていました。

全国大会で2連覇することは難しいと聞いていましたが、自分が入団してからずっと勝ち続けてきた三波分団だけに、全国で負けたときには信じられないという気持ちで正直ショックでした。

今は同級生でもある田邊、山谷には負けたくないという気持ちです。

父と三波分団は僕の自慢 将来は消防団員になりたい

天幸治嘉指揮者の次男
天幸（てんこう） 樹史（たつし）くん（能都中2年）

父は、僕が生まれる前から消防団に入っています。僕が物心ついたときから、いつも仕事が終わってから夜遅くまで、藤波のテニスコートの駐車場で消防操法の練習をしています。

小さいころには、晩ご飯が終わってから母と兄と姉で練習の応援によく行きました。そこで見た父は、家でいつも僕と面白いことを言ってふざけてばかりの父とは違いました。見たことのない真剣な顔で、大声を出して練習に取り組んでいる父がそこにいました。

僕はこれまで、父が出場した地区大会、県大会、そして3度の全国大会の応援に行きました。そこでの父や分団の操作員の皆さんは「ホントかっこいい！」と思いました。僕はそんな父の姿を見て、僕も大人になったら消防団に入りたいと思いました。

父と三波分団は「僕の自慢」です。

本番でベストの状態になるように 一人ひとりを見守ってきた

三波分団
谷政（たにまさ） 伸一（しんいち）副分団長（波並）

わたしはスポーツでいうとマネジャーのような仕事をしてきました。選手の体調面、精神面の管理や必要なものの調達などですが、一番大変だったことは選手が本番にベストな状態にもってこれるよう一人ひとりの調子を見ながら気を配ったことです。

本番では慎重になりすぎていたと感じました。自分自身も前回ほどの「ドキドキ感」はありませんでした。前回優勝ということもあり、三波分団の特徴でもある「攻める操法」ができなかったのだと思います。

自分が選手のときには自分のことだけで精いっぱいでしたが、今の5人は練習の中身も濃く、さらにお互いにアドバイスし合ったりと操法の技術、指導力はついています。選手を続けろとは言いにくいですが、またいつか全国の舞台に連れて行ってほしいと思っています。

三波分団は地域の誇り これからも応援していきたい

波並区長
矜田（きょうだ） 泰春（やすはる）さん（波並）

今回、三波分団の応援に東京ビックサイトに行ってきました。わたしのような素人には点数の差は分かりませんが、地元の分団が全国レベルになってくれたことをうれしく思っています。

わたしも能登に戻った平成2年ごろから5、6年三波分団に入団していました。仕事の都合で消防団は離れましたが、当時から田口正一さん（現能登町消防団副団長）を中心に団結力があったと思います。そしてあきらめずにやってきたことが伝統になって今の強い分団になったのではないでしょうか。

三波分団の活躍で「三波」という地名が全国でも有名になりました。誇りを感じますし、それが地域の人たちの励みにもなってくれればと思います。

これからもできる限りの応援をしていきたいと考えていますので、ぜひ頑張ってほしいですね。

三波分団の訓練をとおして 消防署員も成長できた

能登消防署
坊谷（ぼうたに） 文治（ぶんじ） 署長（布浦）

能登消防署の職員は、毎日4人づつ指導に出ていました。指導するといっても三波分団は非常にレベルが高いので、指導員も一緒に勉強し、教えられ、レベルアップしていったと思います。

三波分団には20年間にわたりトップレベルを維持してきた歴史と伝統があり、先輩たちが築いてきた情報網や選手自身の研究熱心さが現在の素晴らしい成績につながっています。

今大会の操法も素晴らしかった。前回とは違う流れるような操法は本当に見事でした。しかし前回優勝という看板は、審査員の目をより厳しくさせます。その中での準優勝は、本当に価値ある準優勝ではないでしょうか。

三波分団が持つ操法技術は全国に誇れるものです。これからは能登町消防団のリーダー的存在として、地域のために頑張ってほしいと思っています。

ポンプ車の訓練が現場での迅速な活動につながる

能登町消防団
山本（やまもと） 勉（つとむ） 団長（久田）

全国大会で優勝、そして準優勝するということは並大抵のことではありません。今や能登町消防団三波分団は、全国の消防団の目標でもあります。わたしも「どんな練習をしているのか」、「どうすれば強くなるのか」など会合に出席するたびに質問を受けます。いつも「365日練習している」と答えていますが、この練習が実際の火災現場などで大いに役立つのです。若い団員は練習することで消防器材の取り扱いもできるようになります。選手だけではなく、団員みんなで練習することが一番大切なことだと思っています。

能登町消防団には、全国に誇る三波分団があり、ポンプ車操法のレベルはほかの分団も着実に上がっています。三波分団には、これから後輩や若い団員たちを指導してもらい、この高い技術を受け継いでいってほしいと願っています。

三波分団の操法を見守る応援団

最強への歩

あゆみ

訓練、技術、情報を積み重ねて築きあげてきた三波分団の伝統

善野 栄造 三波分団長

ぜんの　えいぞう（波並）

昭和 57 年に三波分団に入団し 58 年から 1 番員。以後平成 15 年まで 3 番員、4 番員、指揮者を担当し、21 年間ポンプ車操法の選手として活躍する。選手としても 2 度全国大会に出場。平成 16 年から三波分団長を務める。

「最初のころは地区大会も勝つことができなかった」と入団当初を振り返る善野分団長。それでも平成元年に地区大会を制した三波分団は、続く県大会で敢闘賞（7位）に入賞する。当時の中心メンバーだった田口正一さん（現能登町消防団副団長）は、もう少し頑張れば県でも優勝できると考え、金沢市などの分団を視察に行くようになったという。

「このころから練習量が格段に増えた」と善野さんは話す。翌年には念願の県大会優勝を果たし、初めての全国大会に出場した。「全国のレベルも、何も分からない状態で出場しただけだった」と振り返る。3年、4年と県大会3連覇を成し遂げ、全国大会にも連続出場を果たしたが、その後は成績が次第に落ちていった。

再び上を目指した三波分団は、これまで培った人脈を生かして岐阜県の強豪と呼ばれる分団を視察し、指導を受けるようになる。「県外の指導者からは特に規律節度の細かい所まで指導された。ここから三波分団は規律節度を重視するようになった」という。

もともとポンプの延長技術には定評があった三波分団に規律節度が加わり、平成13年に9年ぶりの県大会優勝、16年には12年ぶりに全国大会に出場し、準優勝に輝いた。

「三波分団の伝統は、人一倍練習を積み重ねることで自信を持ち、本番に一番いい操法ができること」と善野さんは言い切る。全国制覇を目指した平成18年は冬場から10カ月以上練習の日々が続いたという。「今の5人は家族に申し訳ないと思うほど練習熱心。今年は特に『優勝』『2連覇』というプレッシャーの中で、地区大会、県大会を勝ち、全国で準優勝と本当によくやってくれた」とねぎらう。

2年後の全国大会、石川県代表は小型ポンプ操法での出場となる。三波分団の最強への歩みはまだ止まらない。

三波分団 20 年の軌跡

	地区大会※	県大会（入賞）	全国大会（出場）
平成元年	三波分団	7 位（敢闘賞）	
平成 2 年	三波分団	優　勝	出　場
平成 3 年	三波分団	優　勝	
平成 4 年	三波分団	優　勝	出　場
平成 5 年	三波分団	4 位（敢闘賞）	
平成 6 年	三波分団	8 位（敢闘賞）	
平成 7 年	神野分団		
平成 8 年	神野分団		
平成 9 年	神野分団	優　勝	
平成 10 年	三波分団		
平成 11 年	三波分団	4 位（敢闘賞）	
平成 12 年	神野分団		
平成 13 年	三波分団	優　勝	
平成 14 年	三波分団	準優勝	
平成 15 年	三波分団	準優勝	
平成 16 年	三波分団	優　勝	準優勝
平成 17 年	三波分団	優　勝	
平成 18 年	三波分団	優　勝	優　勝
平成 19 年	松波分団		
平成 20 年	三波分団	優　勝	準優勝

※地区大会は平成 16 年まで東部消防団連合訓練大会
　平成 17 年からは能登町消防団訓練大会

地域のために地域とともに三波分団の挑戦は終わらない。

取材を終えて

全国消防操法大会を初めて取材することができた。広報担当になってから、三波分団は県大会 3 連覇、全国大会連続出場、そして日本一となった。5 年間三波分団の操法を見続けてきた集大成の特集を作りたいと思い全国大会の取材を志願した。

練習する藤波運動公園にも何度も足を運んだ。大会直前まで納得の操法ができず試行錯誤を繰り返す選手と指導員。そこには 2 年前の「とにかく全国制覇を狙う」という挑戦者ではなく、前回優勝という見えないプレッシャーと戦う王者の姿があった。

迎えた全国大会当日。ポンプ車操法に出場し、ライバルであるはずの他県の分団から「頑張ってください」と言われる三波分団。その実力、操法にかける情熱、そして費やしてきた努力が全国で認められている証拠だ。同じく準優勝した岐阜県の分団も、2 年前の三波分団の操法をビデオがすり切れるほど見て、研究してきたという。

観客すべてが注目した三波分団の操法。100％の操法ではなかったが、それでも準優勝を収める安定感が三波分団の強さでもある。

わずか 10 分の操法のために何百時間もの練習を積み重ねてきた三波分団。その最強の消防魂をこれからも燃やし続けてほしい。

特集 三波分団